報　　文

幼稚園教諭・保育士に求められる社会的・職業的自立の基盤技能

西田　明史

（西九州大学短期大学部　幼児保育学科）

（平成 25 年 12 月 18 日受理）

A study on generic skills necessary for kindergarten teachers and nursery school teachers

Akihito NISHIDA

（*Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior College*）

(Accepted December 18, 2013)

報　　文

幼稚園教諭・保育士に求められる社会的・職業的自立の基盤技能

西田　明史

（西九州大学短期大学部　幼児保育学科）

（平成 25 年 12 月 18 日受理）

A study on generic skills necessary for kindergarten teachers and nursery school teachers

Akihito NISHIDA

(*Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior College*)

(Accepted December 18, 2013)

Abstract

In this research, we have examined the generic skills that are required to kindergarten teachers and nursery school teachers. The survey was conducted by mail survey method using a questionnaire, in late April from early March 2013. The subjects of the study were of 850 people are kindergarten teachers and nursery school teachers.

With 40 questions regarding to generic skills, which are based upon social and vocational independence, the following are found.

1. The results of exploratory factor analysis, generic skills necessary for kindergarten teachers and nursery school teachers was composed of 4 factors, 28 items.
2. In nursery field, the skills that from the human relations in a sincere attitude is important. And, these skills tend to be recognized to be important from nursery manager's standpoint.
3. In comparison to kindergarten teachers or nursery school teachers of work experience is short, a person who has a work experience of more than 20 years, was aware that it is important all the factors.

Key word : training of early childhood teachers 保育者養成
potential needs in nursery field 保育現場のニーズ
generic skills 汎用的技能
exploratory factor analysis 探索的因子分析

1．はじめに

中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」[1]において、「学び続ける教員像」が提示された。幼稚園教諭だけではなく、保育士にまで当てはめてこの答申を鑑みると、これからの保育職は、多様化する保育ニーズに対応するため、「保育実践の中から新たな知を見出し、創造する技能・態度」を身につけることが必要だと言える。また、中央審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」[2]では、教師に対する揺るぎない信頼を確立するための「あるべき教師像」として、教職に対する強い情熱や教育の専門家としての確かな力量に加え、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめとする対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を提示している。事実、筆者が勤務する保育者養成校においても、実習を受け入れた保育現場から「挨拶や人と明るく接する態度」「主体的な姿勢」など、社会的・職業的自立に必要な基礎技能や態度に関する要望が寄せられている。すなわち、これからの保育者養成においては、保育の質向上の基盤となるような、保育現場および地域社会で求められる基礎的・汎用的技能の涵養が重要になる。

社会的・職業的自立の基盤となる技能・態度は、学士力[3]や社会人基礎力[4]、就職基礎能力[5]において示されている。これらは一般的であるが、保育現場で特に重視される内容を含んでいるとは言えない。保育職は、乳幼児や家庭・地域との連携など、対人援助に関する業務が多い。また、質の高い保育を展開していくためには、保育の内容に関する職員の共通理解と協働が必要である。したがって、保育職には、特有の基礎的・汎用的技能があるものと考えられる。

そこで、本研究では、保育現場および地域社会で求められる基礎的・汎用的技能の重要度を調査し、幼稚園教諭ならびに保育士に必要とされる社会的・職業的自立の基盤技能および態度を明らかにすることを目的とした。

2．研究方法

2-1. 調査対象者とデータ収集の方法

本研究では、佐賀県内の保育所ならびに認定こども園に回答を求めた。調査は、2013年3月上旬から4月下旬にかけて、質問紙による郵送調査法で実施した。調査に際し、倫理的配慮として、研究目的、研究参加による利益・不利益、取得したデータの取り扱いと結果の公表を明記した。また、無記名による調査とし、回答者が特定されないことや調査への協力が任意であることも併記した。回答の得られた107カ所（回収率=49.5%）の保育所または認定こども園に在籍する保育士・幼稚園教諭850名（最大数）を研究対象とした。対象者の「所属施設区分」「職位」「就業形態」「経験年数」を表1に示した。

表1 回答者の属性

表2-1. 施設区分

項目	%	(n)
幼稚園	0.8	(7)
保育所	97.5	(826)
福祉施設(保育所以外)	1.7	(14)

表2-2. 職位

項目	%	(n)
所（園）長	5.5	(45)
主任	9.5	(78)
クラス担任	73.8	(607)
その他	11.2	(92)

表2-3. 就業形態

項目	%	(n)
常勤	75.3	(617)
非常勤(フルタイム)	18.2	(149)
非常勤(パートタイム)	6.5	(53)

表2-4. 経験年数

項目	%	(n)
～4年	19.3	(160)
5～9年	21.8	(180)
10～19年	33.1	(274)
20年～	25.8	(213)

2-2. 調査内容

幼稚園教諭ならびに保育士に必要とされる社会的・職業的自立の基盤技能および態度について尋ねるため、西田・坂井[6]が作成した「社会的・職業的自立の基盤となる技能および態度の調査」を修正した質問紙を用いた。この調査は、学士力[7]や社会人基礎力[8]、就職基礎能力[9]を包括するような社会的・職業的自立に必要な基盤技能および態度に関する30項目によって構成されている。質問項目の修正に際しては、平成23年度西九州大学短期大学部第2回FD研修会（2012年2月）にて実施されたアンケート調査（自由記述）の結果を参考にした。そして、先行研究[10),11),12),13)]と照らし合わせながら、表現の適否および内容の妥当性を検討し、「1．教養」「4．文化」「6．読解」「10．外国語」「22．自信」「26．関係」「27．状況」「29．統率」「36．努力」「38．適性」の10項目を追加した（表2）。

社会的・職業的自立の基盤技能および態度の重要度に関して、木村・橋川[14]の方法に倣い、「かなり重要」（4点）、「やや重要」（3点）、「少し重要」（2点）、「あまり重要ではない」（1点）の4段階評定による回答を求めた。なお、「かなり重要」は「保育に必要不可欠である技能・態度」、「やや重要」は「保育する上でできるだけ身につけたい技能・態度」、「少し重要」は「保育とわずかに関連する技能・態度」、「あまり重要ではない」は「周辺的で二の次でもいいと考えられる技能」とした。

2-3. 分析

分析は、対象者の基本属性ならびに各調査項目を単純集計し、各回答の相対度数を求めた。社会的・職業的自立の基盤となる技能および態度に関して、保育現場がどのような項目に重要性を感じているのかを明らかにするために、探索的因子分析を行った。因子分析を行う際には、Kaiser-Meyer-Olkinの統計量を確認し、因子分析を行うことの妥当性に十分に配慮した。また、因子分析の結果に基づき抽出された各因子の内的整合性を検討する

表2 社会的・職業的自立の基盤となる技能および態度

No.	質　問　項　目	略称	学士力（文部科学省）	社会人基礎力（経済産業省）	就職基礎能力（厚生労働省）
1	幅広い教養や一般常識を身につけている	教養	知識・理解		
2	要点をおさえてメモ（ノート）をとることができる	記録			読み書き
3	まとまりのある文章を書くことができる	文章			読み書き
4	言語や文化の異なる社会や人々を理解し、尊重することができる	文化	知識・理解		
5	人の話の意図を理解することができる	解釈	コミュニケーションスキル		
6	文章や図表（イラストも含む）の意味を解釈することができる	読解	コミュニケーションスキル		
7	状況に応じた表現・言葉・文法を使って話をしたり文章を書いたりすることができる	表現	コミュニケーションスキル		自己表現力
8	人の意見や考えを丁寧に聴くことができる	傾聴	コミュニケーションスキル	傾聴力	意志疎通
9	自分の意見や考えを口頭で分かりやすく説明することができる	説明	コミュニケーションスキル	発信力	意志疎通 自己表現力
10	特定の外国語（英語など）で読み、書き、聞き、話すことができる	外国語			
11	自然や社会の出来事について、数値や図（グラフや表など）を活用して理解したり、表現したりすることができる	数量	数量的スキル		数学的思考力
12	図書やインターネットを用いて、情報を収集・整理し、適正に活用することができる	情報	情報リテラシー		情報技術関係
13	コンピュータを用いて文書や図表を作成することができる	操作	情報リテラシー		情報技術関係
14	これまでに得た情報や知識を活用し、筋道を立てて考えることができる	論理	論理的思考力		
15	現状を多方面から分析し、課題を明らかにすることができる	発見	問題解決力	課題発見力	向上心・探究心
16	課題解決に必要な取り組み・方法・手順を明らかにし、準備することができる	計画	問題解決力	計画力	
17	課題解決に向けて確実に行動することができる	実行	問題解決力	実行力	
18	これまでの経験等を活用して新しい発想や価値（アイデア）を生み出すことができる	創造	創造的思考力	創造力	
19	指示を受ける前に自分で考えて進んで行動することができる	主体	自己管理力	主体性	
20	やるべきことの優先順位をつけるなど、時間を有効に活用することができる	時間	自己管理力		
21	健康の維持・向上のための規則正しい生活（食事・運動・休養）を実践することができる	健康	自己管理力		
22	自分に自信や肯定感を持っている	自信			
23	自分の感情を適切にコントロールすることができる	精神	自己管理力	ストレスコントロール力	
24	意見の違いや立場の違いを理解し、受け入れることができる	共感		柔軟性	協調性
25	人と協力しながら物事をすすめることができる	協調	チームワーク		協調性
26	人とすぐにうちとけたり、会話を始めたりすることができる	関係			
27	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解することができる	状況		状況把握力	
28	人に働きかけて、課題解決にむけて共に行動できる	共同	リーダーシップ	働きかけ力	
29	率先して集団をまとめてリードすることができる	統率	リーダーシップ	働きかけ力	
30	何事にも我慢強く取り組み、最後まで続けることができる	忍耐			
31	自分から挨拶をしたり、人と明るく接したりすることができる	社交			基本的なマナー
32	先生や上司など、目上の人からの教えを素直に聞き入れることができる	誠実			
33	自己の良心や学校・社会のルールに従って行動することができる	倫理	倫理観	規律性	
34	社会の一員としての意識を持ち、社会の発展のために役割を果たすことができる	責任	社会的責任		責任感
35	進んで課題を見つけ、高い目標に向けて行動することができる	向上	生涯学習力		向上心・探究心
36	新しい知識や技能を身につけようと努力するすることができる	努力	生涯学習力		向上心・探究心
37	状況に応じた服装や身だしなみをきちんとすることができる	服装			基本的なマナー
38	自分の適性や能力を把握することができる	適性			
39	自分のなりたい人材像や目指す職業が明確になっている	目標			職業意識・勤労観
40	目指す職業に求められる専門性（知識や技能など）や役割を自覚している	職業			職業意識・勤労観

ため、Cronbach の α 係数を算出した。

なお、すべての統計処理には、SPSS 20.0J を用いた。

3．結　果

3-1. 保育現場における社会的・職業的自立の基盤技能・態度の重要度

保育現場が認識している社会的・職業的自立の基盤技能・態度の重要度について、各項目における回答の相対度数を表３に示した。

「かなり重要」の回答の相対度数が最も高かった項目は「31. 社交」の 90.6％であった。次いで、上位項目は、「８. 傾聴」（88.5％）、「25. 協調」（87.2％）、「32. 誠実」（81.1％）、「５. 解釈」（78.1％）の順であった。一方、「かなり重要」の回答の相対度数が最も低かった項目は、「40. 外国語」の 3.5％であった。次いで、「11. 数量」（6.0％）、「13. 操作」（15.7％）、「12. 情報」（16.5％）の順であった。また、「かなり重要」と「やや重要」の回答を合わせた相対度数が 36 項目において 80％を超えていた。しかも、「あまり重要ではない」の回答の相対度数は、「11. 数量」（16.7％）と「10. 外国語」（25.6％）を除いた 38 項目において 0.5 ～ 8.1％であり、１割にも満たなかった。

したがって、調査項目として掲げた 40 項目の社会的・職業的自立の基盤技能および態度は、程度の差こそあれ、保育現場において重要だと認識されている。さらに、保育現場での重要度が高かった技能・態度を見ると、コミュニケーションスキルや協調性、自己管理力、基本的なマナーに関する項目が多く含まれていた。それらに対して、語学力や数学的思考力、情報リテラシーに関する項目は重要度が低かった。

3-2. 保育職基礎力の尺度作成の試み

本調査により得たデータを用いて幼稚園教諭ならびに保育士に必要とされる社会的・職業的自立の基盤技能および態度（以下、「保育職基礎力」と略記する）の尺度の作成を試みた。

本調査における社会的・職業的自立の基盤技能・態度に関する 40 項目の合計得点の幅は 54 － 160 点であり、平均値は 137.25 点であった。40 項目の合計得点を３分位に分けて GP 分析を実施した結果、いずれの項目も尺度として適切であった。I-T 分析の結果、項目得点と合計得点との相関係数が 0.4 未満であった「10. 外国語」（r=.224）、「11. 数量」（r=.346）、「13. 操作」（r=.393）の３項目を尺度から削除した。

尺度項目として不適切だと考えられた３項目を除いた 37 項目を用いて、因子抽出法として最尤法、回転法として Kaiser の正規化を伴う Promax 法による探索的因子分析を行った。因子の抽出は、固有値が１以上、因子負荷量が 0.4 以上、かつ複数の因子に 0.3 以上の負荷量を示さないことを基準に選定し、再度因子分析を行った。４回の因子分析の結果、４因子、28 項目を抽出した。Kaiser-Meyer-Olkin の統計量は .966 となり、因子分析の妥当性が保証された。なお、因子パターン行列と因子間相関の結果を表４に示した。

第１因子は、11 項目から構成されており、職業意識・勤労観（「39. 自分のなりたい人材像や目指す職業が明確になっている」「40. 目指す職業に求められる専門性や役割を自覚している」）や生涯学習力（「35. 進んで課

表3　回答の割合

順	№.	略称	(n)	かなり重要	やや重要	少し重要	あまり重要ではない
1	31.	社　交	(848)	90.6	7.5	0.6	1.3
2	8.	傾　聴	(849)	88.5	9.9	0.7	0.9
3	25.	協　調	(849)	87.2	10.8	1.1	0.9
4	32.	誠　実	(850)	81.1	16.7	1.2	1.1
5	5.	解　釈	(845)	78.1	20.0	1.3	0.6
6	33.	倫　理	(848)	77.9	19.8	1.3	0.9
7	21.	健　康	(850)	75.5	20.4	2.9	1.2
8	37.	服　装	(849)	74.4	21.8	2.6	1.2
9	20.	時　間	(850)	74.4	23.2	1.4	1.1
10	9.	説　明	(848)	72.5	24.6	2.1	0.7
11	24.	共　感	(850)	71.5	25.3	2.4	0.8
12	23.	精　神	(848)	68.4	27.9	2.6	1.1
13	19.	主　体	(850)	68.2	28.6	2.2	0.9
14	30.	忍　耐	(849)	65.6	30.5	3.4	0.5
15	7.	表　現	(847)	65.5	30.0	3.9	0.6
16	40.	職　業	(850)	65.2	30.9	2.5	1.4
17	1.	教　養	(848)	63.4	31.7	4.1	0.7
18	3.	文　章	(845)	62.7	31.2	5.2	0.8
19	36.	努　力	(849)	62.5	32.9	3.9	0.7
20	18.	創　造	(849)	62.1	31.9	4.9	1.1
21	17.	実　行	(848)	62.0	32.9	4.2	0.8
22	34.	責　任	(847)	61.7	33.1	4.4	0.8
23	16.	計　画	(846)	54.8	38.3	6.1	0.7
24	28.	共　同	(850)	53.9	40.5	4.9	0.7
25	27.	状　況	(847)	51.2	42.9	5.3	0.6
26	35.	向　上	(847)	50.9	42.7	5.7	0.7
27	26.	関　係	(848)	50.4	44.0	4.7	0.9
28	38.	適　性	(849)	47.9	46.3	5.2	0.6
29	4.	文　化	(846)	46.3	41.8	10.6	1.2
30	14.	論　理	(848)	44.5	46.3	8.4	0.8
31	2.	記　録	(848)	43.8	45.0	10.3	0.9
32	39.	目　標	(850)	42.2	50.5	5.5	1.8
33	15.	発　見	(845)	41.2	47.0	11.0	0.8
34	6.	読　解	(846)	40.8	50.9	7.6	0.7
35	22.	自　信	(848)	32.2	53.7	13.0	1.2
36	29.	統　率	(848)	31.1	55.2	12.6	1.1
37	12.	情　報	(848)	16.5	51.5	29.1	2.8
38	13.	操　作	(847)	15.7	47.1	29.0	8.1
39	11.	数　量	(845)	6.0	31.5	45.8	16.7
40	10.	外国語	(849)	3.5	21.0	49.9	25.6

（％）

題を見つけ、高い目標に向けて行動することができる」「36. 新しい知識や技能を身につけようと努力することができる」）の項目が含まれる。他にも、「28. 人に働きかけて、課題解決にむけて共に行動できる」「34. 社会の一員としての意識を持ち、社会の発展のために役割を果たすことができる」「27. 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解することができる」等の項目も含まれる。よって、第１因子を「物事に主体的に参画し、協働する力」とした。

第２因子は、「25. 人と協力しながら物事をすすめることができる」「32. 先生や上司など、目上の人からの教えを素直に聞き入れることができる」「24. 意見の違いや立場の違いを理解し、受け入れることができる」を含む７項目から構成されるため、「自他隔てなく誠実な姿勢で人間関係を形成する力」とした。

第３因子は、「16. 課題解決に必要な取り組み・方法・手順を明らかにし、準備することができる」や「17. 課題解決に向けて確実に行動することができる」を含む５項目から構成されるため、「課題解決に必要な取り組みを考え、実行する力」とした。

第４因子は、「７. 状況に応じた表現・言葉・文法を使って話をしたり文章を書いたりすることができる」や「２. 要点をおさえてメモ(ノート)をとることができる」を含む５項目から構成されるため、「自他それぞれの意

表4 保育現場に求められる社会的・職業的自立の基盤スキルの因子分析の結果

No.	略称	質問項目	因子１	因子２	因子３	因子４
第１因子		物事に主体的に参画し、協働する力 （α =.917）				
39	目標	自分のなりたい人材像や目指す職業が明確になっている	**.820**	－.008	－.149	.096
38	適性	自分の適性や能力を把握することができる	**.803**	－.054	－.026	.036
29	統率	率先して集団をまとめてリードすることができる	**.652**	－.103	.034	.051
35	向上	進んで課題を見つけ、高い目標に向けて行動することができる	**.624**	.014	.129	.007
27	状況	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解することができる	**.614**	.101	.100	－.042
28	共同	人に働きかけて、課題解決にむけて共に行動できる	**.611**	.106	.245	－.135
34	責任	社会の一員としての意識を持ち、社会の発展のために役割を果たすことができる	**.561**	.242	.031	－.088
26	関係	人とすぐにうちとけたり、会話を始めたりすることができる	**.539**	.203	－.046	.005
22	自信	自分に自信や肯定感を持っている	**.536**	－.080	.020	.100
40	職業	目指す職業に求められる専門性（知識や技能など）や役割を自覚している	**.509**	.216	－.031	.139
36	努力	新しい知識や技能を身につけようと努力するすることができる	**.496**	.205	.091	.018
第２因子		自他隔てなく誠実な姿勢で人間関係を形成する力 （α =.905）				
31	社交	自分から挨拶をしたり、人と明るく接したりすることができる	－.122	**.952**	－.063	.013
25	協調	人と協力しながら物事をすすめることができる	－.117	**.887**	.122	－.079
32	誠実	先生や上司など、目上の人からの教えを素直に聞き入れることができる	.047	**.823**	－.144	.047
33	倫理	自己の良心や学校・社会のルールに従って行動することができる	.184	**.711**	－.099	.013
21	健康	健康の維持・向上のための規則正しい生活（食事・運動・休養）を実践することができる	.207	**.542**	－.052	.022
24	共感	意見の違いや立場の違いを理解し、受け入れることができる	.222	**.526**	.063	－.011
20	時間	やるべきことの優先順位をつけるなど、時間を有効に活用することができる	.030	**.479**	.132	.180
第３因子		課題解決に必要な取り組みを考え、実行する力 （α =.864）				
16	計画	課題解決に必要な取り組み・方法・手順を明らかにし、準備することができる	－.050	.037	**.894**	－.049
15	発見	現状を多方面から分析し、課題を明らかにすることができる	.103	－.223	**.728**	.114
17	実行	課題解決に向けて確実に行動することができる	－.028	.231	**.694**	－.061
14	論理	これまでに得た情報や知識を活用し、筋道を立てて考えることができる	.078	－.147	**.573**	.226
18	創造	これまでの経験等を活用して新しい発想や価値（アイデア）を生み出すことができる	.142	.250	**.418**	.017
第４因子		自他それぞれの意図を論理的に表現する力 （α =.813）				
3	文章	まとまりのある文章を書くことができる	－.018	.063	－.042	**.789**
7	表現	状況に応じた表現・言葉・文法を使って話をしたり文章を書いたりすることができる	－.117	.106	.221	**.616**
6	読解	文章や図表（イラストも含む）の意味を解釈することができる	.149	－.060	.006	**.613**
2	記録	要点をおさえてメモ（ノート）をとることができる	.164	－.063	－.018	**.494**
9	説明	自分の意見や考えを口頭で分かりやすく説明することができる	.009	.240	.150	**.401**

因子間相関	因子１	因子２	因子３
因子２	.751		
因子３	.711	.675	
因子４	.659	.600	.683

注）最尤法、Promax 回転による。因子負荷量が 0.4 以上を太字とした。

図を論理的に表現する力」とした。

抽出された４因子を構成する下位尺度の内的整合性を検討した結果、Cronbach の α 係数は、第１因子「物事に主体的に参画し、協働する力」(.917)、第２因子「自他隔てなく誠実な姿勢で人間関係を形成する力」(.905)、第３因子「課題解決に必要な取り組みを考え、実行する力」(.864)、第４因子「自他それぞれの意図を論理的に表現する力」(.813) であり、いずれにおいても高い値を示したことから､内的整合性があることが確認された。

抽出された４つの因子間の相関係数を求めたところ、すべての因子間において比較的強い有意な正の相関 (r=.600 ～ .751) が認められた。

3-3. 対象者の属性別にみた保育職基礎力の重要度

基本属性によって対象者を複数の群に分け、回帰法により推定した各因子の因子得点の平均値を比較した。

「職位」別に見た各因子の因子得点の平均値を図１に示した。保育職基礎力の重要度を対象者の「職位」別に見ると、所（園）長は、クラス担任と比較すると、第２因子｢自他隔てなく誠実な姿勢で人間関係を形成する力」を重視する傾向があった。主任は、所（園）長およびクラス担任と比較すると、第１因子から第４因子までのすべてをより重視する傾向が見られた。

図２に「就業形態」別に見た各因子の因子得点の平均値を示した。保育職基礎力の重要度を対象者の「就業形態」別に見ると、常勤は、非常勤（フルタイム・パートタイム）と比較すると、第１因子から第４因子までのすべてを重視する傾向があった。

図３に「経験年数」別に見た各因子の因子得点の平均値を示した。保育職基礎力の重要度を対象者の「経験年数」別に見ると、20 年以上の経験者は、他の経験年数区分と比較すると、第１因子・第２因子・第４因子をより重視する傾向があった｡経験年数が４年目までの者は、５～ 19 年の経験年数区分と比較すると、第１因子「物事に主体的に参画し、協働する力」と第３因子「課題解決に必要な取り組みを考え、実行する力」を重視する傾向が見られた。

４．考察とまとめ

保育現場のニーズに対応できる実践力ある保育者を養成することを目的として「保育職基礎力」の尺度の作成を試みた。保育士ならびに幼稚園教諭を対象としたアンケート調査より得たデータを用いて探索的因子分析を実施した結果、「保育職基礎力」は４因子、28 項目により構成された。

本研究の結果によると、保育現場では、社交性や協調性、倫理観などによって構成される第２因子「自他隔てなく誠実な姿勢で人間関係を形成する力」を重視する傾向が強かった。このことは、所（園）長および主任、職務経験が 20 年以上の保育者において顕著であった。一方、因子分析の一連の手続きによって、知識・理解、語

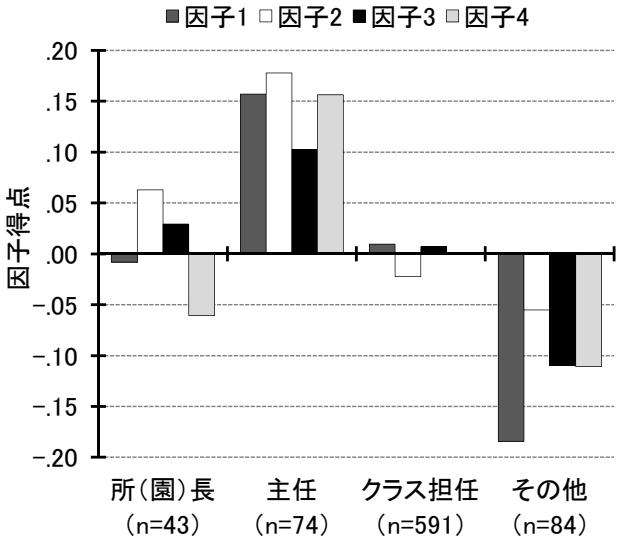

図1　職位別に見た各因子の因子得点

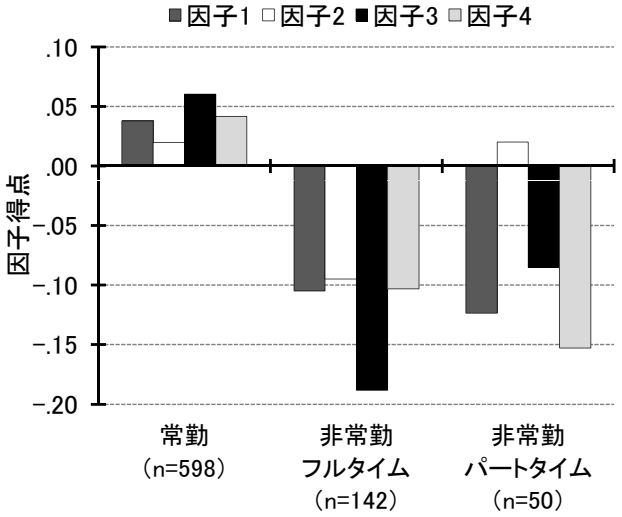

図2　就業形態別に見た各因子の因子得点

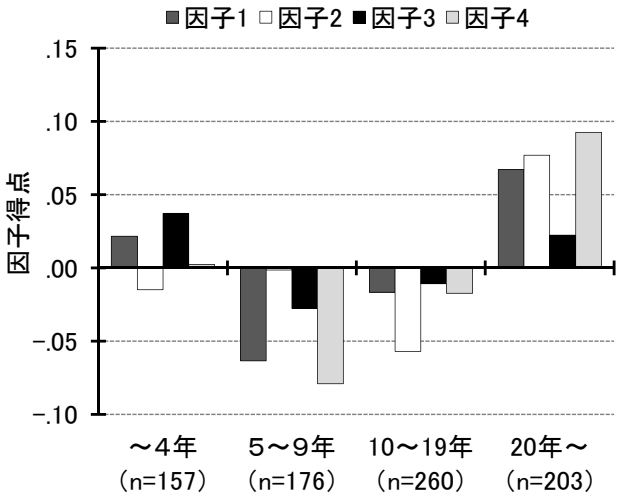

図3　経験年数別に見た各因子の因子得点

学力や数学的思考力、情報リテラシーに関する項目が尺度から削除された。これらの結果は、保育職の性質を表している。保育現場では、乳幼児との関わりのほか、家庭や地域との連携など、対人援助に関する業務が多い。ゆえに、保育実践力には具体的な支援や援助である指導力に関わる内容が多く含まれている[15]。したがって、保育実践との関連性の高い項目が「保育職基礎力」の尺度として多く残り、保育との関連性が低い項目は社会的・職業的自立に必要なスキルであっても尺度から削除されたと考えられる。

保育職基礎力のその他の因子について見ると、第１因子「物事に主体的に参画し、協働する力」と第３因子「課題解決に必要な取り組みを考え、実行する力」は、就業形態が常勤、職務経験が４年以下および20年以上の者において、重視される傾向にあった。保育所保育指針[16]の第７章「職員の資質向上」には、保育士に求める専門性と人間性として、「保育実践や保育の内容に関する職員の共通理解を図り、協働性を高めていくこと」が示されている。また、保育の質の向上に関して、保育士一人一人の高い倫理観を重視しながらも、保育課程や指導計画に基づく保育実践の振り返りの重要性を示している。そのためには、自己評価に基づく課題等を踏まえた主体的な自己研鑽が必要であり、他の職員や地域の関係機関などとの関わりの中で共に学びあう環境を醸成していくことも求められる。保育士の専門性の向上には、多様化する保育ニーズへの対応が不可欠であり、保育に関する科学的根拠を基盤としながらも、保育実践の中から新たな知を見出し、創造する技能・態度も必要である。したがって、保育職における「物事に主体的に参画し、協働する力」と「課題解決に必要な取り組みを考え、実行する力」は、保育の質を高めるために必要なスキルだと考えられる。

主任ならびに20年以上の職務経験を有する者は、第４因子「自他それぞれの意図を論理的に表現する力」を重視する傾向にあった。保育現場では、乳幼児や保育の記録、年間計画や月・週・日の各指導計画の作成、研修報告など文章作成を必要とする業務が多い。そればかりか、園・クラスだよりや連絡ノート、送迎時の会話などにおいて、口頭または文章を用いて説明する機会も多い。保育所保育指針[17]には、第４章「保育計画及び評価」において、保育の計画と記録、自己評価を通した保育士の専門性の向上と保育実践の改善の必要性が明記されている。また、保育所の社会的責任として、保護者や地域社会に保育の内容を適切に説明することが示されている。すなわち、保育現場における「自他それぞれの意図を論理的に表現する力」は、子ども理解の深化と保育内容の充実を図っていくために必要なスキルだと言える。

文　献

1）文部科学省（2012）教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について，中央教育審議会答申.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf（参照日 2013 年 12 月）.

2）文部科学省（2005）新しい時代の義務教育を創造する．中央教育審議会,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05102601.htm,（参照日 2013 年 12 月）.

3）文部科学省（2008）学士課程教育の構築に向けて．中央教育審議会答申 ,
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf（参照日 2011 年３月）.

4）経済産業省（2006）「社会人基礎力」～今，社会で求められる力～.
http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/shiryou1.pdf,（参照日 2011 年３月）.

5）厚生労働省（2004）「YES- プログラム」の概要.
http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/03/dl/h0321-1a.pdf,（参照日 2011 年３月）.

6）西田明史・坂井加奈（2010）幼稚園教諭・保育士を目指す学生の汎用的技能の実態．永原学園西九州大学短期大学部紀要，42：17-24.

7）文部科学省（2008）学士課程教育の構築に向けて．前掲.

8）経済産業省（2006）「社会人基礎力」～今，社会で求められる力～．前掲.

9）厚生労働省(2004)「YES- プログラム」の概要．前掲.

10）濱名篤（2010）学士課程教育のアウトカム評価とジェネリックスキルの育成に関する国際比較研究．平成 19-21 年度科学研究費補助金基盤研究（B）課題番号 19330190.

11）山田剛史・森　朋子（2010）学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割．日本教育工学会論文誌，34(1)：13-21.

12）山村滋（2010）高校と大学の接続問題と今後の課題－高校教育の現状および大学で必要な技能の分析を通して－．教育学研究，77(2)：157-170.

13）Benesse 教育研究開発センター（2009）大学生の学習・生活実態調査報告書.
http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/pdf/,（参照日 2011 年７月）.

14）木村直子・橋川喜美代（2008）「保育実践力」尺度

作成に関する研究―保育士・幼稚園教諭養成校教員の考える保育実践力を手がかりに―. 保育士養成研究, (26)：33-38.
15）木村・橋川（2008）前掲.
16）厚生労働省（2008）保育所保育指針.
17）厚生労働省（2008）保育所保育指針.

謝　辞

本研究の実施に際し、調査にご協力いただきました保育所（園）および認定こども園の職員の皆様に心より深謝申し上げます。

付　記

本研究は、平成 24 年度永原学園教育研究助成金「幼稚園教諭および保育士に必要な社会的・職業的自立の基盤となる技能・態度とは何か」（研究代表：西田明史）によって行われたものである。